

Since
1936

リコーのあゆみ

【トピックス】



1936 - 1969

創業～事務機分野進出



リコーは、理化学研究所の研究開発を工業化するために設立された「理化学興業株式会社」から感光紙事業を継承し、1936年に「理研感光紙株式会社」として創業しました。翌年にはカメラ事業にも進出。1950年代初頭にカメラの大量生産体制をわが国で初めて確立し、一般大衆へのカメラの普及を促進しました。1955年にはリコピー101を発売し、事務機分野にも進出しました。

1970 - 1984

OA を提唱

1985 - 1999

デジタル化を推進

2000 - 2009

グローバルカンパニーへ

2010 - Present

新たなお客様価値の創造へ

1936年2月6日

理化学興業株式会社から独立し、 理研感光紙株式会社として設立（～1938年）

リコーの創業者、市村清

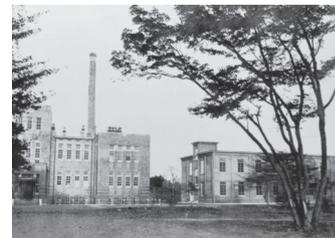
わが国の科学振興を目的に創設された理化学研究所はその研究成果の事業化を図るために1927年「理化学興業株式会社」を設立、ここから多くの理研製品が発売されていきました。同社の感光紙事業を大きく発展させたのがリコーの創業者、市村清（1900～1968）です。彼は感光紙部門いっさいの事業を継承し、1936年2月6日にリコーのルーツである理研感光紙株式会社を設立。資本金35万円、従業員33名の出発でした。

創業の精神として市村が提唱した「三愛精神（人を愛し 国を愛し 勤めを愛す）」は、事業・仕事を通じて、自らとその家族、顧客、関係者、社会のすべてを豊かにすることを目指した考えで、今もリコーグループの全社員が経営や仕事を行ううえでの原点としているものです。

そしてリコーの誕生

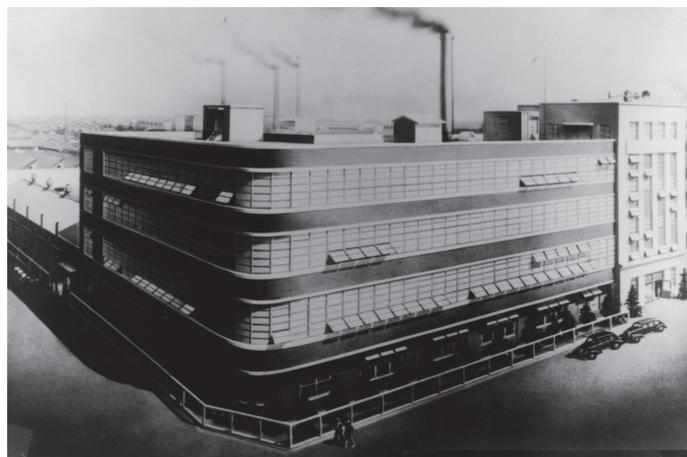


市村清写真



発足当時の理化学研究所（東京・文京区）

理研感光紙（株）から理研光学（株）へと社名を改めた頃の本社（東京・銀座8丁目 1938年）



感光紙製造の主力工場であり、時にはカメラ、双眼鏡もつくった理研光学王子工場（1938年）

1950年5月

カメラの大衆化の先駆け、6×6判二眼レフカメラ 「リコーフレックスⅢ型」を発売

カメラとしては初のベルトコンベア方式による大量生産を実現。当時のカメラ生産は手工業で、月産数百台からせいぜい1,000台程度が普通だった時に、本機は桁違いの10,000台が生産されました。これにより、当時贅沢品だったカメラを安価で提供することにも成功。カメラの大衆化・一大ブームを巻き起こし、国内のカメラ生産量の50%以上をこの一機種で独占したとされています。



日本の産業界では初のベルトコンベアシステムを採用（1953年）
これによるカメラの大量生産方式は後の大河内記念生産賞受賞にもつながりました



リコーフレックスⅢ型（1950年）



カメラの大量生産方式を確立したことによって大河内記念生産賞を受賞（1957年）

関連サイト

リコー歴史カメラ「リコーフレックスⅢ」

<http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera/cameralist/flexIII.html>

1936 - 1969

1970 - 1984

1985 - 1999

2000 - 2009

2010 - Present

1955年11月

ジアゾ複写機の1号機「リコピー101」を発売。事務機器分野へ進出

本機は、2012年度「機械遺産」第54号に認定されました

1950年代後半、「複写する」という代わりに「リコピーする」という言葉が生まれ、複写の代名詞として広く普及しました。そのルーツは、1955年発売の「リコピー101」です。リコピー101とそれに続く一連の卓上型ジアゾ湿式複写機リコピーシリーズは、オフィスオートメーション(OA)のさきがけとして事務作業の合理化に革命をもたらしました。同機は、一般社団法人日本機械学会から2012年度「機械遺産」第54号に認定されました。



現存する最古のリコピー101

事務のオートメーション化のために

品質を誇る
50枚の写しが10分間でとれる……

→ 理研光学の卓上複写機

リコピー

両面印刷物の複写も
リコピー用フィルター
で簡単にできます

303型 (A3用)	¥ 138,000
505型 (A2用)	¥ 168,000

支店
福岡市東区中洲2の1
長崎市西區町135
札幌・仙台・大阪・
名古屋・京都・高山
神戸・岡山

理研光学工業株式会社

販売記入申込次書カタログ請求

当時の広告



続々と生産されるリコピー303・505 (1957年)

関連サイト

リコピー101: オフィスオートメーションのさきがけ

<http://jp.ricoh.com/company/history/2000/ricopy101.html>

1962年4月

静岡県沼津市に製紙工場を建設

感光紙工場も併設し、世界初の原紙抄造から感光紙までの一貫生産体制を確立

1960年4月、静岡県沼津市に製紙工場を建設。
1962年には感光紙工場も併設し、世界初の原紙抄造から感光紙までの一貫生産体制が確立されました。



現在の沼津事業所（南プラント）



完成した沼津工場の抄紙機（1960年3月）



EF感光紙塗布ライン（沼津事業所）

1962年5月

大森に本社事務機工場と総合研究所を竣工

1962年5月、大森本社に事務機工場、総合研究所を建設し、その後マイクロ写真機器、オフセット印刷機、DPS機器など幅広い製品分野に進出していきました。



本社事務機工場と総合研究所が完成



披露パーティーで挨拶する池田勇人首相と市村社長（1962年5月17日）



1962年11月

ハーフサイズの大ヒット作となった 「リコーオートハーフ」を発売

1960年には国産初の自動露出EEカメラ「リコーオート35」を完成したリコーは、1962年にはフィルムの巻き上げも自動化し、完全に押すだけで写るハーフサイズカメラ「リコーオートハーフ」を発売。ハンドバッグに入る、実用カメラとしては当時世界最小サイズの自動化カメラとして、女性ユーザーの拡大にも大きく寄与しました。



リコーオート 35



リコーオートハーフ (1963年)



オートハーフの大きさ比較



オートハーフのシリーズ機

関連サイト

[リコー歴史カメラ「オートハーフ」](http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera/cameralist/AH.html)<http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera/cameralist/AH.html>[カメラ史に残る長寿命機「リコーオートハーフ」\(1962\)](http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera_lib/library/1962.html)http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera_lib/library/1962.html

1963年4月

社名を株式会社リコーに変更

事業の多角化が進み社名を1938年に「理研光学工業株式会社」と変更。1960年代に入り売上高100億円を超える企業となった理研は、1963年4月社名を現在の「株式会社リコー」に改め、さらに大きな飛躍を遂げることとなります。



1963年に生まれたコーポレートロゴ

理研光学は
4月1日より
「株式会社リコー」
に社名を変更
いたします

カメラと事務機の総合メーカー
RICOH

当社は、昭和11年2月に創立され、以来まったく独自の道を歩んでまいりました。その間、進歩的ながさかずの大衆カメラを送り出したリコーカメラ部門、リコービームをはじめとして複写、管理、計算の分野まで進出したリコー事務機部門、世界的な水準を達成したリコー感光紙部門の各製造部門と、独自の研究陣を擁した類のない総合メーカーに発展し、製品のすべては「リコー」の名のもとに親しまれるようになりました。このため、当社名を、製品ブランドとしての「リコー」と一致させ、みなさまに一層愛される企業に脱皮することを、かねがね急務と考えてまいりました。また昨年、貿易の自由化と、海外への伸展にちなんで、英文社名をRICOH COMPANY LTD.と改めましたのも、此度の新社名への布石であります。

いまや全社員は、業界における「リコー」の地位に誇りをもち、わが国生活文化の向上と、世界企業への躍進を期しております。これを機会に、なにとぞ「リコー」のブランドを、一層深く愛してください。ようお願ひ申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

新社名 株式会社リコー
旧社名 理研光学工業株式会社
取締役社長 市村 清

理研からリコーへの社名変更広告（1963年）

関連サイト

ロゴマークのあゆみ

<http://jp.ricoh.com/company/history/logo/>

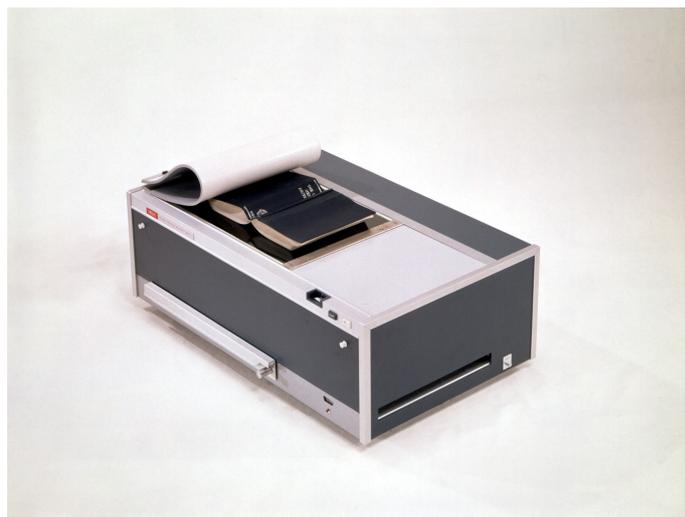
リコーのあゆみ

<http://jp.ricoh.com/company/history/>

1965年9月

静電複写機「電子リコピー BS-1」を発売

1965年に発売された「電子リコピーBS-1」は、当時の業績不振からリコーを救った立役者となりました。デスクトップ機として世界で初めて原稿台固定方式を採用し、シートだけでなく本などの冊子もの、さらには織物、宝石、機械部品、食器などでもコピーがとれるBS-1は、「なんでもコピー」の時代をリードするとともに、本格的な世界進出への道を切り拓く原動力にもなりました。



電子リコピー BS-1 (1965年)



当時の電子リコピーのキャンペーン広告 (1965年)



南極観測船「ふじ」で活躍する電子リコピー BS-1 (1966年)